

国際理解学習のすすめ

飯田市教育委員会前教育長

伊澤宏爾 氏

伊那谷写真クラブ会員

元小学校教諭

橋都とみ子 氏

今日は私が今まで取り組んできました国際理解学習についてお話をさせていただきます。
なぜカンボジアか？なぜ国際交流に取り組んだのか？ということですが、これには前段
がありますのでその話から入らせていただきます。

1 学校現場での国際理解学習の取り組み

・深刻な生徒指導問題に直面し対応策として考えたこと

私は高等学校の現場にいました。バブル絶頂期、日本の高度成長期に高等学校の現場では高校生が大変荒れました。私はその頃上伊那にいましたが、放課後校内にバイクが乗り込んできて、体育館の中をブンブンと回っていました。

こんな光景を見て生徒指導、生活指導は大変だなあと思いましたが、「この子ども達が将来日本を背負って立つんだ、なんとかこの子ども達にしっかりした学びの場が提供できないか」と考え、当時の教員仲間と随分議論を重ねました。

口角泡を飛ばし議論した結果「日本の高校生は甘えているのではないか。井の中の蛙ではないのか。」ということで、もっと広い視野を持たせよう、体験させよう、それにはどうしたらいいのだろうかと考えました。

高校生に国境を越えて外国へ行き、同じ年代の若者達と交流し、そこでお互い刺激あって理解することで日本の高校生はどうなのか、ということを知ってもらいたいということで国境を越えさせようということになりました。

しかし、当時、長野県の教育委員会は修学旅行を含め、高校生が海外へ行くということが許されない時代でした。そこで色々考えましたが、最終的には親が連れていくのなら大丈夫だろうということになり、PTA において PTA 会長が団長となり連れて行く、ということで県教育委員会へ書類を提出しました。

「親が連れて行くのなら仕方ない」ということで、親の責任で教員は随行するということが始まったのが最初です。思い起こせば随分昔のことですが、そんな形で国際交流が始まりました。

その後、たまたま私は文部省の教育機関へ派遣され、その時に日本全国の高校生の国際交流学習の現状を調査するという課題があり、それに取り組むことになりました。そして、ドイツ、フランスの高校生の教育事情、特に国際理解学習についての視察調査があり、その体験が底辺に流れているかと思えます。

・下伊那農業高校の中国との交流

下伊那農業高校へ赴任した頃から中国との交流を始めることになります。蘇州農業学校との交流は現在も続いています。

ーカンボジアとの出会いー

● 1991 年 森本喜久男さんとの出会い

カンボジアとの出会いは 1991 年です。京都大学の渡部先生主催の『アジア太平洋の農耕文化の会』という研究会があり、そこで「メコン川を下る旅」というのがあり、参加することになりました。

内戦が長く続き大変なことになっていたカンボジアですが、京都出身の森本喜久男さんというクメール織の復活に熱心に取り組んでいる友禅染職人と運命の出会いをしました。その素晴らしい取組に感銘を受け、このカンボジアとの交流は高校生にとって大きな力になるということで、以来毎年高校生をカンボジアへ連れていくことになりました。

● 1993 年 下農高校にインターアクトクラブ設置

1993年に飯田東ロータリークラブが下農高校にインターアクトクラブを設置して下さることになりました。インターアクトクラブというのは国際理解学習を活動の中心とするということでしたので、下農高校にとっては絶好のチャンスと捉えて積極的に受け入れ活動が始まりました。

● 1999 年 堀本崇さんに会う

最初は台湾という話がありましたが、観光に行っても仕方がない、ということで高校生が実のある交流が出来る所ということで選択を迫られました。その時にたまたま阿智村駒場の堀本崇さんという青年が飯田高校から明治大学法学部、そして松下政経塾の第13期生を経てカンボジアに居ました。

なぜカンボジアにいたかという堀本さんが松下政経塾を終える時に民主国家を創ることを目的に、カンボジア初めての総選挙が行われることになり、国連の関係から選挙が公正に行われるようにということで指導、監視員として派遣されていました。その関係で是非堀本さんの力を借りようということで行きました。

そこにポルポト時代難民として亡命をしていたヘン・モニチェンダさんという僧侶に出会いました。カンボジア救国の主と言われ、一生懸命にカンボジアを復興に導いている方です。そしてポルポト時代フランスへ亡命していたカンボジア憲法委員会委員長のソン・スーベルさんというソンサン元首相の長男の方とも知り合いました。この方たちとの出会いから、高校生のカンボジア・スタディツアーを充実させていきたいということで色々ご指導をいただきました。

インターアクトクラブの活動は5年間という期限がついていましたので、せっかく5年間活動してもそれが終了してしまえば残念だということで、どうやって継続していけばよいかと考えた時に、NPO 法人を立ち上げてその活動の一部に国際交流を取り入れていったらどうかということでNPOを立ち上げました。

● 2002 年 「ふるさと南信州緑の基金」設立

平成14年、私の退職と同時に NPO の申請をして認可を受け活動に入りました。【NPO ふるさと南信州緑の基金】と言いますが、これは飯田市の行政とも関係があり、今盛んに行われています農家体験実習やエコツーリズム体験の受け皿となっています。

平成17年にエコツーリズム全国大会が飯田市で開かれることが決まり、その実行委員会も当 NPO 法人が受け皿となって実施されました。

● カンボジアに学校を建てよう

2003 年（平成15年）にカンボジアから森本喜久男さんを招聘し飯田市で講演会を行いました。その時に森本さんに今カンボジアですぐにでもやらなければならない重要なことは何ですか？とお聞きしたら、それは教育であるとのことでした。今の子ども達がカンボジアを背負って立たなければならないが、都市と農村には格差があり、農村では殆どの子ども達が学校へは行けない状況である、なんとか識字率を上げたいと。

私たちが最初に行った頃、大人の中には自分の名前は言えるけれど書くことが出来ない、計算が出来ないという人が多くいました。何とか教育の場を整えたいと森本さんは切に言われました。

もう一つは農業の復興だと言われました。「私はとっさの判断で協力するから、なんとか学校を作りましょう」ということで、**カンボジアに学校を建てる**というプロジェクトをスタートさせました。

校舎一棟を建てるのに 400 万円から 500 万円掛かるということでしたが、学校を建てるに約束した以上なんとかお金を工面しなくては、ということで募金も考えましたが、友人の息子さんや娘さんがピアニストとして世界で活躍していましたので、帰国した折に東京で1回、飯田で3回ピアノリサイタルを開き、その収益の中から支援いただきました。それから現在の飯田美術博物館館長の滝沢具幸さんには、高校の同級生のよしみで絵を描いて協力いただき現在も続いています。

● 2007 年 「飯田小学校」開校

市民の皆さんからも多くのご支援をいただき活動が始まりました。お金が集まる度に現地へ届けていましたが、2007 年（平成19年）に最初の校舎が完成しました。

森本さんが「**飯田小学校**」と命名しスタートしました。看板は小町谷先生に書いていただき、ケヤキの木の板に高校生が彫って学校に掲げました。そうした多くの皆さんの協力で現在教育が進められています。

カンボジアの教育制度は6・3・3制ですが教員と校舎の関係で午前と午後入れ替えをします。実質日本の半分しか授業が出来ないという状況です。必要とするお金は私共がなんとかするので、森本さんは、「伝統の森」というクメール織を生産する大きな森（ビレッジ）で生活する人達、特に男性の皆さんに大工、左官等の仕事をして校舎を建ててください、ということで3者で協定を結び建設を進めました。

● 2010 年 カンボジア王国の認可校となる

現在「飯田小学校」は国の認可を受け、私立ですがカンボジアの認可校として国から

2人の先生を派遣していただき、最初は1年生から3年生の30名位からスタートしました。今は1年生から6年生まで80余名の子ども達が学んでいます。
そういったことでカンボジア・スタディツアーは細々ではありますが続けてきました。

● 2011年 飯田市主催高校生講座国際交流派遣事業スタート

私は平成17年から飯田市の教育委員会に御世話にり、市長と話をする中で飯田市の将来を担う若者達の人材育成に役立つ事業はないだろうかということで、国際的感覚を身に付けさせようということになりました。そして飯田市主催の高校生講座を平成23年に始めたわけです。

最初は中国蘇州の農業学校の生徒達との交流ということで中国を訪問しました。2回目は韓国の原州市、これは飯田市が行っています「やまびこマーチ」の大会姉妹提携を結んでいる都市です。

● 2013年飯田市教育委員会事業に位置付ける

2年間の活動を総務の企画課が担当で行いましたが、どうしても教育的センスというのが表に出てきません。市長からも、「もう少し教育的観点から人材育成が出来ないか」ということを言われまして、私もそう感じていましたので「飯田小学校」で学ばせてもらったかどうかということになり、平成25年に第1回高校生講座「カンボジア・スタディツアー」がスタートしました。そして5回継続して実施してきました。そして今年度6回目の準備をしているところです。

平成27年度には佐藤副市長にも参加していただき、次に代田教育長、昨年度は牧野市長に参加してもらいました。今後更に内容を充実させていこうと計画しているところです。スタディツアーは、次代の地域を担う高校生を対象に、地域に誇りと愛着を持ちながらグローバルな視点で飯田を捉え、地域の将来ビジョンを描ける人材の育成を目的としています。

2 飯田市公民館高校生講座「カンボジア・スタディツアー」の展開

事前の学習活動を通じて高校生が外を見て内を振り返る、ということで世界に目を向けながら地域で活躍する若者の育成も目的としました。

対象は下伊那8校で飯田市内に在住、または飯田市内の高校に通う1、2年生で、郡外から飯田市内の学校に来ている人もOKです。

教育分野の人材育成ということで管轄は教育委員会です。教育の観点からということでどこが担当するかと色々考えましたが、飯田市は公民館活動が活発ですので主体を公民館にしようということにしました。

飯田市は20ヶ所の公民館支所があり、そこに一人ずつ公民館主事が派遣されています。その主事全員に高校生講座の指導担当になってもらい、指導面、現地へも同行して学んでもらうということで、飯田市の公民館の主幹事業としました。

後ほどふれますが、市町村で海外との交流をするのにどの部署が管轄するのかというのは大きな課題ではないかと思います。

● メアス博子さんとの交流

私たち NPO 法人「ふるさと南信州緑の基金」がカンボジアに飯田小学校を設立することでカンボジアのいろんな分野の方々との交流がありました。

一定の実績を挙げて積み重ねてきている「緑の基金」と飯田市教育委員会が一体となってやろうということになりました。カンボジアではメアス博子さんとの出会いがありました。この方はカンボジアの方と結婚し孤児院を経営しております。

素晴らしい経営をしていますが、カンボジアの子ども達の教育環境はまだまだという段階ですので、なんとか孤児院の子ども達を日本的感覚で教育してみたいと考え、孤児院では高校まで生活し、卒業すると大学へ行きたい子は進学し、働きたい子は勤めに行くという生活ですが、日本的に規律正しい生活で運営されています。

メアス博子さんとの交流もあり、出会った方との交流をベースにしたプログラムになっています。NPO「緑の基金」の会員は毎年 10 名位が現地で高校生と共に活動をしています。

● 旅行会社の選択

もう一つ大事なことは旅行社の選択です。観光旅行であればどの会社でも良いと思い、最初私はこちらの旅行社を通じて飛行機の手配をし、宿泊や行動計画については現地で日本人がやっている旅行社を利用しました。この現地の旅行社は東南アジアを中心とした取扱いをしており、微に入り細に入り指導してくれる会社でした。その会社は社長が飯田出身の方で、原優二さんといって「はと錦」というお菓子屋さんの次男の方です。飯田の高校生講座についてはプログラムの編成から現地での生活まで全て、また高校生の事前学習から帰国後の報告会まで全ての面をサポートしてくれています。

● 地域作りから人材育成へ

今までの飯田市の海外派遣の経過は地域作りから人材育成へとシフトしました。平成 19 年のドイツ派遣、これは高校生というよりは飯田市の若者達を派遣してきました。

平成 23 年に中国、平成 24 年に韓国と、国際感覚を持った人材育成ということで平成 19 年から始めていましたが、平成 25 年からはカンボジアの研修ということになりました。現在までに高校生 73 名が参加しています。高校生の学習の三本柱ですが、まず「ものさしづくり」です。

夏休みに募集をかけてレポートを提出してもらい、9 月に参加者の決定をします。10 月から事前学習に入ります。まず地元を知る、自分達の足元をしっかりと見ようということです。

高校生は生まれてから現在まで、まだ 10 数年しか経っていませんので地域の事は殆ど知りません。地域はどうなのか、どういう状態にあるのかということをまず学習してもらいます。3 班に分けて課題を持って学習活動に入ります。それからカンボジアのことについても学びます。

カンボジアはどういう所なのか、飯田小学校はどうなっているのかなどを資料やお話で学びます。そして 3 月末から一週間現地へ行きます。

3 国際化・国際理解学習への問題提起

観光旅行ですと見るだけで終わってしまいますが、汗して体験をします。帰国してからまとめをして6月の市民向け発表会に臨みます。

帰国後カンボジアへ行ってどうだったか、自分達はどんな視点や価値観を見つけたのか、ということをして4月から毎週集まり準備をします。市役所での発表会後は、色々な機関から呼ばれて発表します。JICA 駒ヶ根研究所でのフォーラムとか中学校での進路指導の場、地区の研修会にも行きます。高校生にとってどんな時間にしたいかということですが、等身大の自分で挑む機会ということで、学力や進路という枠を外してとことん考える時間になるかと思います。

● 気づきの整理・共有

学校、学年の枠を超えていろんな人達が集まりますので、多用なメンバーシップで最初はぎこちないメンバーも合宿して食事をつくり、一緒に食べて交流をしますと、だんだん打ち解けてきて素晴らしい仲間作りができるようになります。

それから自分の考えや感覚、気づきというものを仲間と共に行動することによって自分自身と向き合い、変化していくということを彼等実感しているようでした。

● 全体学習スケジュール

全体学習のスケジュールはどうかということですが、最初10月の親睦合宿から始まります。11月には市長に講話をしてもらいます。市長が考えている地域作り、リニアの時代に向かって飯田市がどんな方向で進んでいるのか、といったことを学びます。12月には向こうで孤児院を運営しているメアス博子さんのお話を聞きます。現地ではメアス博子さんの孤児院で学ばさせていただきます。またカンボジアのクメール織物研究所で下久堅の伝統和紙作りの技術を伝える活動をしてきた此間春美さん達にも講師をお願いしました。

何を学びたいかということとその都度計画しますが、今年のメンバーは和菓子作りの文化を学びたいグループ、水引の文化を学びたいグループ、遠山の暮らしを学びたいグループと三つに分かれまして現地に赴くことになりました。

● 現地のスケジュール

3月にはカンボジアへ行き、交流でレクレーション等をしますのでそのプログラムを作って準備をしています。現地へ行ってからのスケジュールですが一週間とはいっても行くに1日、帰りに1日かかりますので実質は5日間です。

1日目は村部のバイヨン中学校へ行き交流です。難民として日本へ来て学び、高校、大学を卒業後カンボジアへ帰国して活躍している方が理事長です。

2日目はスナードイ・クマエ孤児院（メアスさん運営）で一日研修をします。向こうの子ども達が学ぶ教科は少なくても国語と算数と理科、社会科くらいです。音楽、体育、家庭科という教科はありません。

最近話題になっているのが日本式の運動会で、私達もミニ運動会を準備して飯田小

学校での運動会交流をします。子ども達は小さく、飯田の文化とか話してもわからないので身体を動かすことが主となります。

3日目はアンコールワットの見学をします。アンコールワットは世界遺産なのでカンボジアといえばアンコールワットという観光地です。

観光なら見てそれで終わりですが、アンコールワットが今カンボジアでどういう位置付けになっているかということを知ってもらいたいということが目的です。

～異文化接触～

以前、アンコールワットへ行った時に入口の西参道の石垣が崩れていて、その修復工事をしていました。そこを通った時に下の方で日本語が聞こえました。見ると日本人の姿を目にしました。現場までおりて行って挨拶をすると上智大学の石沢先生でした。現在も修復が続けていますが、石沢先生との出会いがあり、先生が運営している現地の研究所へ高校生を連れて行きましょうということになり、次の年から「上智大学遺跡研究所」へ毎年行くようになりました。

カンボジアの子ども達の多くは修学旅行もないので殆どアンコールワットを知りません。アンコールワットは石で組み立ててありますので12世紀頃の建物ですから崩れてしまっています。それを世界の国々が協力して修復をしています。

石沢教授は「アンコールワットの修復は外国人がやってしまってはダメである。カンボジア人が自分の国の心として、自分の国が守るんだということでカンボジア人に技術を教えて、自分たちで修復して遺跡を守るという精神を伝えていくことが大事である」ということを盛んにおっしゃいます。そのことを私たちは高校生に知ってもらいたいという思いから研究所へお邪魔するようになりました。更に今年は新しい事をということで、一般は立ち入れない修復現場へもヘルメットを被って見学をさせていただきました。カンボジアの人々が一生懸命技術を学んでいるところを見学してきました。

高校生には向こうの芸術、文化に直接触れられるような、或いは農村を訪ね農民の皆さんや子どもたちと話をするといったことを計画しています。

地域を知ることでは、黒田人形、上村の霜月祭りへの参加、お菓子製造、泰阜の地域起こし隊の女性による鹿の解体等色々学びました。カンボジアで行うレクリエーションの練習や水引細工の練習も行いました。

～文化の違い～

トンレサップ湖の水上生活を見学しました。カンボジアは乾季と雨季には水位が10メートルも変わりますので高床式の住居で暮らしています。またシェムリアップ郊外ではゴミ山を視察しました。

カンボジアはゴミが分別されていないので、大きな穴を掘って何でもかんでも埋めていくだけです。高校生は悪臭の中を歩き環境問題について考えました。

帰国後報告会に向けて子ども達は思いつくことを全部書き出し、それを絞り込んで発表に繋げていきますがとても時間がかかる作業です。まとめた個人レポートは今南信州新聞に掲載されています。

～高校生たちの気づき～

国際交流の実際から学んだこと

- ・人と人との繋がりあるいは人が元々持っている感情はみな同じである
- ・他人の情報を鵜呑みにせず自分で判断する力を付けたい
- ・自分が未熟だということを自覚すること

このようなことが振り返りの中から出てきました。

世界に通用する大切なことは、自分達の生まれ育った所、足元にあった、ということが
高校生の最後のまとめでした。

4 文化の違いの理解

最近よく国際化ということが言われますが、国際化というのをどのようにとらえたら良いのかということです。今までは一部の人の課題ととらえていましたが、今では全ての人について国際化を考えて行かなければと思います。

相手の文化を理解することだけで良かった時代でしたが、これからはこちらの文化を相手に理解してもらうという相互の考え方が必要だと思います。今までは仲良くすれば良かったが、これからの国際化というのは共通の目的を持って共同する、そういう時代になっていると思います。

～青少年期の「国際理解学習」のすすめ～

「とにかく子ども達を混ぜてしまうこと」と書きましたが、私はフランス、ドイツで学んだ時に目から鱗の体験をしました。

フランスの中学の校長先生が話してくれたことですが、フランスとドイツは数百年に渡って戦争を繰り返してきた国同士ですが、フランスの子ども達にアンケートをとると、一番信頼できる外国人はどこのか？という問いにドイツと答えるそうです。これはどうしたのかと思いますと、終戦後、徹底的に両国の関係を良くしようと教育面で相互交流を繰り返したそうです。

ドイツの歴史の教科書をフランスでは副読本として使っているのを見て、ここまでやるのかと思い国境を越えて同じ世代の子ども達と混ぜてしまおうと考えました。

～国際交流の実際から学んだこと～

国際感覚を学ぶことが出来ること、お互いに理解も深まるだろうと考えました。そうすることで今日に至っているわけですが、国際交流の実際から学んだことを挙げてみました。国際交流学習は観光旅行ではないので一回で終わるわけではありません。最初に無理をすると長続きしないと考え、今年はここまで深めておこう、来年はここまでと、細く長く続けようと考え実施しています。

～人と人との出会いを大切にする～

人と人との出会いですが、カンボジアには多くの日本人が行って活躍しています。その

人達との出会いを大事にするということが大切だと感じています。

次の研修や訪問をお願いするということで、出会いを大事にすることが宝になると私は感じています。

～学校としての取り組み姿勢～

学校として取り組む場合、教職員の意識改革、PTA 同窓会の理解が大事だと考えます。

～行政の関わり方の意識改革～

行政で行う場合はどこの部署で担当するのかということ、そしてプログラムをどう組むかということで教育的観点を中心に据えた方向が必要だと感じています。

高校生(若者)たちの力は無限大

高校生たちの無限の力というものを痛切に感じます。これは参加した高校生たちが、まとめて発表して、いざ自分の人生にどう生かしていくか、これも大きな観点だと思います。

追跡調査はしていませんが、参加した生徒達はどういう方面に進路選択したか大体承知していますが、5年経ちましたので調査を行い数字的に捉えてみたいと考えています。

高校生は非常に伸び代があります。特に自分の進路決定に自分できちんと意思表示をするようになりました。

現在高校の教員になっている生徒が3人、語学の大切さを痛切に感じて他の学部を目指していただけれど外語大のクメール語の学部へ行った生徒とか進路を変えた生徒がいました。

長姫高校の建築科に学んでいた女生徒は、カンボジアで痛切に感じたのは教育だということで信州大学の教育学部へ進学しました。

このように自分で決断して進路を決定しています。また、外国の情報をもっと日本に知らせたいということで大学の情報関係の学部へ行った生徒もいます。

高校では2年生の時に生徒会の選挙がありますが、過去に参加した生徒が生徒会長に立候補したこともありました。そのように力を付けて活躍しています。一年間共に学んだ子ども達が想いを綴った言葉の中に感銘を受けた言葉がいくつかあります。

- ・ 自分の幸せ（行動）は、いつも自分の汗と心が決める
- ・ 人生において最も大切な時、それは今だ
- ・ 創り出した物差しは、重ね重ねて人生の巻尺になる
- ・ 挑戦の種を播かなければ、夢の花は咲かない

これは高校生が直に感じたことです。未来を担う青少年の為に行政、学校社会教育、市民団体等による多彩な国際交流、国際理解学習の実践、展開が今本気で求められているのではないかと思います。

そういう意味で私共の活動は小さな活動ではありますが、細く長く続けていって地域の将来を担う子ども達の為に少しでも役に立てればと思います。皆様の地域で高校生の活動に理解、助言をしていただければと思います。以上で終わります。

スナーダイ・クマエ孤児院での活動の様子 一写真からー 橋都とみ子氏

こんにちは 私は山吹の上平に住んでいます。主婦ですが、方々へ写真を撮りに行きますのでその時名刺が必要となり、所属している2つの写真クラブと、「ふるさと南信州緑の基金」の会員としての肩書を載せています。

普段は農業等をやっています。今日は伊澤先生がスタディーツアーの全体像のお話をされましたので、私はスナーダイ・クマエ孤児院での高校生の活動の様子を写真で紹介したいと思います。

この年（2015 年）、高校生は日本の文化をどのようにしてカンボジアの子ども達に知ってもらおうかということで交流の計画を立てました。

文化の紹介としてオリエンテーション的な活動でサッカー、縄跳び、鬼ごっこなど日本の学校の休み時間の遊びのようなことが中心となりました。

自己紹介では日本語とクメール語で自分の名前を書き、昼食にはみんなでカレーを作りました。スナーダイ・クマエの子ども達は毎日自分たちの食事を作っていますので、大変手際が良いです。

縄跳び遊びも上手で普通の跳び方ではなくて逆立ちをしながら跳んだりしてとても身の軽い子ども達です。カンボジアの男の子たちはサッカーが大好きですが皆裸足です。裸足でも日本の高校生達が追い付かないほどの速さでした。

次の 2016 年には内容を変えてジャンケン列車や二人三脚などみんなでひとつのことをすることにしました。みんなで集団活動をすることによってお互いのスキンシップが増えると共に、活動する楽しさや喜びが実感できたように思います。

集団活動を成立させるための準備にもみんなで話し合う時間を沢山とりまして、高校生達のチームワークもより強いものになったように感じました。

運動会的なことの経験の無い子ども達でしたので何をどうやるのかと伝えるまでが大変でしたが、とても飲み込みの良い子ども達ですぐマスターしました。

二人三脚はカードを使ってペアを作り一緒に走りますが、すごい速さで日本の高校生達は引き摺られるようにして走ります。

運動の後は日本の高校生達が漢字や平仮名を教えて、大きく描かれた桜の木の下に自分の想いを書き、日本から用意していった緑の葉っぱが貼られて木が完成すると、みんなの気持ちが一つになったなあということを感じました。

2017 年になりますとまた内容が変わってきます。折り紙の御守や玉入れのボール作りなど高校生が活動への自信や期待を持って向かう姿が見られるようになりました。





自分達が使う道具や用具は自分達の手でカンボジアへ持ち込みます。玉入れのボールは日本から新聞紙とガムテープを持って行って交流会の前夜、ホテルでみんなで作成しました。そして素晴らしいボールが沢山出来て玉入れゲームを楽しむことができました。

2018年になりますと講座の内容が変化してきました、今までのように綱引きや二人三脚のようなお互い競争したり競い合う交流から、仲間同士で考えたり工夫したり、言葉が通じなくても身体表現で積極的にコミュニケーションを図る活動が多くなりました。

そのことによって日本の高校生になかなか心を開けなかったカンボジアのある一人の少年が、今までになく積極的に活動に加わる姿が見られるようになりました。

日本人とカンボジア人との間にあった見えない壁のようなものがだんだんと消えていくような気がしました。

今年は水引でストラップを作りました。飯田の伝統工芸がこういう形で浸透していく、こういうことを考えた高校生達は素晴らしいなと思いました。

次は新聞乗りゲームの写真です。新聞紙がだんだん小さくなっていくのでギュッと抱きしめ合うスキンシップです。

ジェスチャーで動物を当てるゲームでは最初恥ずかしがっていた子ども達も当たるとガッツポーズが出るようになりました。



ゲームの最中に外からとても大きなヘビが入ってきてみんなビックリしたんですが、現地の方がつかまえて夕飯のおかずにするということでまたビックリ。

飯田学校では節分の行事を説明して豆の変わりにボールを投げたり、日本から持って行ったお菓子を食べたり、風越高校の皆さんが集めた洋服をプレゼントしました。そして飯田の伝統工芸の水引を紹介しましたが、英語で行う高

校生の説明を真剣な表情で聞く女の子達はとても綺麗な子が多いです。

カンボジアは雨期になると一気に水嵩が増すので、家は全て高床式です。生活用水は井戸水で、洗濯や食事の支度をします。訪れた農村ではひとつらドルのハンモックを売って生計を立てていました。家畜の世話は子ども達の仕事で、まかされた子ども達は大変よく働きます。子ども達はとても元気で明るくて、どこでも裸足で駆け回ります。カンボジアはいつもゆったりとした時間が流れています。以上で写真の説明を終わります。



